

「分割・民営化」-10万人首切り の先兵になることを宣言した 労働本部 全国大会



85. 7. 5
No. 1982

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

ペテン・裏切り・テロリンチの仕掛人 革マル・松崎明を委員長にすえて

六月二五日から二八日までの四日間、箱根町で開いた労働「本部」第四一回全国大会は、労働を産報化運動に引きこみ、国鉄労働者の利益を売りわたすとともに、労働千葉組合員にあらん限りのテロ・リンチを繰り返してきた憎むべき労働革マルの頭目・松崎明（東京地本委員長）を委員長にすえ、日帝・中曽根の国鉄労働運動解体攻撃に全面屈服し、早々と白旗をかかげて「分割・民営化」-10万人首切りに率先協力していく反動方針を決定した。国鉄労働者の敵であり、すべての労働者人民の敵「労働本部」革マルを一掃し、国鉄決戦の大爆発をかちとろう。

国鉄決戦からの逃亡-裏切りは明白

大会は、「六二年度分割・民営化」-10万人首切りの監理委答申を目前に、これとどう対決し闘うのかについて論議するのではなく、発言のほとんどが「三本柱クリアー運動」の苦労話が延々と続けられた。「親や妻に泣かれて派遣に応じた」話や、「派遣者が親の葬式にも帰れなかった」等々の話が「美談」として語られ、さしずめ宗教団体の総会と見まがちがう、一種異様なふん囲気の中で終始した。

それでは、労働「本部」革マルが国鉄労働者の命運を決する情勢の到来の中で、いかなる方針を決定したのかを見てみよう。

「運動の展開と具体策」の「国鉄Ⅱ労組攻撃粉碎・国鉄労働運動の強化」の項では、「国鉄再建監理委員会による国鉄『分割・民営化』の答申に対しては社会党・総評と連携をとって反対の取り組みを強化する」とし、「当面の取り組み」の中には「・・・総評の『国鉄再建闘争本部』に参画し、『政策』『闘い』の内容について意志統一を図ることを前提として一定の闘争指令権について委譲する」としている。

すなわち、労働「本部」革マルは、日帝・中曽根による国鉄労働運動を解体するための「分割・民営化」-10万人首切り攻撃と主体的に闘う決意も方針も打ち出せないばかりか、ことあるごとに「裏切り者」呼ばわりしてきた総評・社会党におぶさり、なんと「闘争指令権の委譲」という前代未聞の「方針」を決定したのである。

これは、日帝・中曽根の「戦後政治の総決算」をかけた攻撃に真先に屈服し、「冬の時代だから闘うべきではない」と主張し、当局の先兵となつて「働こう運動」「三本柱クリアー運動」を推進してきた労働「本部」革マルが自ら血を流して闘うことなど決してありえず、「分割・民営化」-

十万人首切りとの闘いを裏切ることとはもとより、その責任を総評や国労などに転嫁し、国鉄労働者の弾劾から身をかわそうとする反動的な方針なのである。

すでに国労が決定している「答申直後のストライキ」方針に対し、「今はストの時期ではない。答申内容を細かく検討し反国民的、反労働者であることがはっきりしたらストを構える」（松崎なるペテンをもつて、裏切りの正当化を図っているのだ。

「産報化」運動に純化した反動方針

さらに、方針は次のようにいう。
「反合理化と労働条件改善」の項では、「新たな職場を拡大し、技術教育を強化し、さらに『三本柱』の組織的クリアーの実績を積み上げ、雇用安定協約を締結し、維持・確定していく」とか、「国鉄Ⅱ労組攻撃粉碎・国鉄労働運動の強化」の項では「『三本柱』の組織的クリアーをさらに強化し、雇用の確保をはかる」としている。

労働「本部」革マルの「国鉄を国鉄として残すために骨身を削って働こう」なる反動路線が「分割・民営化」の前に破産する中で、「雇用を守るため」などとこっそり路線転換したうえで、より骨身を削って働き、出向・休職を推進する産報化運動を全面展開し、組合員に奴隷になることを強要している。

まさに、労働「本部」革マルの方針は「分割・民営化」-10万人首切りを推進し、革マル分子だけ生き残ろうとする反動的なものである。

そして、こうした反動路線を強行するために、労働者人民の敵「労働革マル」の頭目・松崎明を委員長にすえ、国鉄労働者を地獄にひきこもうとしているのだ。今こそ労働革マルを一掃し、国鉄決戦の爆発で「分割・民営化」-10万人首切りを阻止しよう。